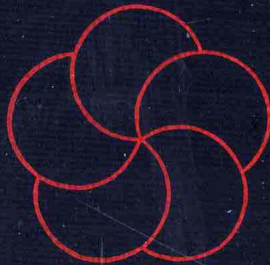
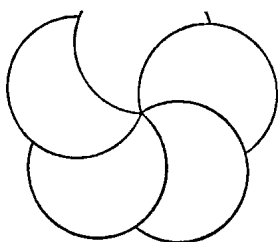


7

日本文学の歴史



人間開眼



7 人間開眼

日本文学の歴史

井本農一 西山松之助 編

日本文学の歴史（全12巻）

第7巻 人間開眼

昭和42年11月20日 初版発行

定価 650 円

編 者
井 本 農 一
西 山 松 之 助
発行者 角 川 源 義

印刷所 中光印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所
製版所 株式会社 高木写真製版所
発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13
振替東京195208番
電話東京(265)7111番

© Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

太平の世の到来

九

徳川政権の確立 新文化の土壌 いざやかぶかん 「夢の浮世ぢやただ狂へ」 天下一 将
軍と歌舞伎 生まれくる近世調 民族のリズム 守・介・椽の氾濫 封建的ヒエラルヒー
武から文へ 育ちゆく遊芸文化 男の世界 文化交流の三態 エリヤの車で じゃがたら文
略奪文化の系譜

中国への傾斜と王朝のリバイバル

三

天下の宗匠 世界の学、朱子学 現実と人間の確認 三教一致 文盲からの脱出 合理主義
道徳の文学 三つの説 伝統文学の立場 宇治の唐寺 漢籍の氾濫 帰化人の影響 寛永
の文化圏 流布本の成立 隠者の文学

万葉への思慕と和歌

五

細川幽斎のがれる 幽斎と古今伝授 転換期の悲劇―長嘯子 東山靈山の隠者 長嘯子の新風
万葉への郷愁 木瀬三之と『万葉集』 山荘を訪れた青年 長流の歌学革新 契沖の生活
契沖と古学 戸田茂睡の反抗 国学の成立と春満 勸善懲惡主義の文学観

生活のなかの仮名草子

六

ついでた野望の遺産 ルビつき小説仮名草子 整版の発明 輸入本のリプリントと翻訳 かぶ
き者葛の恨の介 恋文の手本『薄雪物語』 笑いの文学 やぶ医者竹斎 もじり物二編 庶
民の知識欲 問答体をとる啓蒙的作品 仁王禅祖鈴木正三 随筆二点 報道文学のかずかず
プロ作家浅井了意 了意の風刺・批判 浮世草子への接近 遊女評判記・遊里案内記 衆道

俳諧人口の拡大

102

爛酒談笑の即興 放埒さこそ生命 専門作者の誕生 プームの兆 貞門の拡大 太平の世の俳諧 桃花手折る貞徳 縄張り争い 万波興る 故郷をあとにして 宗因と正方 貞門から談林へ ここに談林の木あり 守武流軽口 関将西鶴 三都の談林 破邪顯正 漢詩文調 談林の落とし子 かぶく和歌

出雲の阿国とかぶく人々

103

慶長八年春三月 歌舞伎踊り登場 かぶき族の世界 踊りの効用 風流プーム 謎の女、出雲の阿国 阿国歌舞伎の脇役たち 流れの身から籠の鳥へ 遊女のスター、和尚 女優追放 かっこいいお小姓たち 若衆歌舞伎の花開く 將軍家光と猿若勘三郎 若衆歌舞伎の客席風景 野郎歌舞伎の出現 傾城買いの狂言

庶民の歌声

104

三味線登場 レジャーは悪所で とじこめられる郭歌 風呂あがりの小歌 太夫の吐息 二つの文化圏 もう一つの悪所 のし歩く歌舞伎歌 踊り明かす村と町 流しの歌い手たち なまめく労働歌 民謡の長い足

元禄風の展開

105

大公方と『論語』 紀文と奈良茂 大名貸の妙味 無冠の第三貴族 江戸と上方 麻から木綿へ 文化の流れ 在郷町の文化生活 育ちゆく俳諧の周辺 文化市場の拡大 マスプロ製品の需要 心中ばやり 抜参り

繚乱たり王道論

106

儒風変転 東西両学派 寡黙の人、貝原益軒 狭量傲慢な男、闇斎 熊沢蕃山と陽明学 山
鹿流兵法の祖、山鹿素行 素行と古学 偉大な儒者町人より出る 愛を中心にした学者 豆腐
のおからで生きる 祖徠の学問 鬼臉ヲ被テ小兒ヲ嚇ス 木門の人々

漂白の詩人芭蕉

汲む桃の酒 故郷は伊賀上野 部屋住みの青春 未来への決意 水道工事のアルバイト 芭
蕉の女性関係 ゆきづまる談林派 貧に生きる 旅に出る 風狂宣言 捨て子を後にする芭
蕉 雪見のために庵に帰る 芭蕉の予感 『おくのほそ道』旅行へ 遊女との同宿 造化に
したがひて四時を友とす 俳諧の古今集『猿蓑』 蕉風以外の俳壇 鬼貫は二流か 江戸に帰っ
て かるみと反蕉風 最後の旅へ 日東の杜子美

西鶴の人間探求

人間探求の作家 近代によみがえる 町人作家西鶴 阿蘭陀流 孤独な記録保持者 好色の
追求 肉体の賛歌 古典の摂取 粹の美学 描き終えた好色 ストーリーテラー 金銭の
作家 見ぬく目 大晦日は一日千金 集団描写の文学 絶望に耐える笑い 落魄の人生

義理と情の作者近松

浄瑠璃かたれ、ともしびのもと 民衆のアイドル 語り物の系譜 客を呼ぶ新芸能 スーパー
マン金平 花ひらく京浄瑠璃 義太夫節の制覇 朽ちはつる覚悟 出世作『世継曾我』 歌
舞伎を第一、浄瑠璃を第二に 転身の妙 町人ドラマ 発達する人形舞台 興行師出雲 義
理と情の文学 人間の責任 豊竹座の創設 紀海音の浄瑠璃 巨星墜つ

花ひらく元禄の舞台

筑紫路をゆく旅役者 整備された歌舞伎舞台 類型的な登場人物 敵役登場 元禄のスターた
ち 女より女らしく 江戸随市川団十郎 雷神となった徳高き上人 舞台の好色人 藤十郎

の恋 憂鬱な近松 名作者歌舞伎界を去る 殺しと心中 人間、この興味あるもの 脚本の整備 芸評の確立 幕おりた元祿歌舞伎

啓蒙の潮流

三四

絵島生島 偉大なる偶然 衆愚政治の反省 米將軍の悲哀 大岡さばき 庄屋の日記から『西鶴織留』を読む村人たち 香・俳諧に興ずる四国の農民 普及する高級遊芸 組織される家元制度

俳諧の流行

三六

臨終前後 蕉風三派 時流に棹さす 墨守する人々 田舎蕉門 都市俳諧の盛行 江戸座の流れ 半時庵一派 大衆化の要因 俳諧企業の成立 地方への浸透 売名と論争 俳書の出版

西鶴の追隨者と版元合戦

三八

亜流の悲しみ ブックレボリーション 好色本の氾濫 アルバイトする貧乏俳諧師 抜け目のない本屋 新書判のベストセラー 愛読者のひろがり 傾城と風流の対抗 出版業界の関が原 其積の反乱 八文字屋の制覇なる 享保の八文字屋本 末期の作者たち 浮世草子の終焉

浄瑠璃の伝統

四〇

歌舞妓は無きがごとし 名人団平の失敗 相競う西風と東風 梅は飛び桜は枯るる世の中に女房悦べ、悴はお役に立つたぞ 統一世界像への願望 芝居の独参湯 忠臣蔵騒動 ステゴザウルスの悲劇 回天のあがき 歌舞伎小屋となった竹豊両座 文化の植民地江戸 最初の同業組合 説経贅語座事件 太夫は何人役者は何匹

伸びゆく舌耕文芸

四六

日本最初の文化講義 『太平記』読み 講釈と講談 講談あれこれ 三都の
話芸 談義の娯楽化 神道の変わり種 はなしの本 二つの道 町に出た話芸
号 斬の創作 落語史の人々 舌禍第一

特集・人物風土記

『おくのほそ道』の旅

二五四

日光まで 白河の関 松島まで 最上川 北国路 再会

西鶴と大坂

二八四

旅こそ師匠なれ 西行ゆかりの地を訪ねて 道頓堀の水 矢数俳諧の地 変貌する寺町

近松と近江

三二三

転身の秘密を探る 交通の要衝逢坂山 芸能の祖神 遊行者の結集地 蟬丸宮を訪れる近松
悠久の琵琶湖

参考文献

四四六

日本文学年表

四四八

あとがき

四五八

執筆者（五十音順）

井本 農一 大久保 正 大曾根 章介 小笠原 恭子
 角川 源義 岸 得藏 郡司 正勝 島 居 清
 神保 五弥 鈴木 勝忠 諏訪 春雄 中村 幸彦
 西山 松之助 長谷川 強 森 修 森川 昭

本巻協力者

興津 要 梶 真知子 熊倉 功夫 小玉 光雄 今田 洋三
 佐藤 喜久雄 竹内 誠 中村 俊定 中村 光生 延広 真治
 芳賀 登 原 道生 久富 哲雄 武藤 元昭 弥吉 菅一
 演劇出版社 大阪府立図書館 表千家 京都国立博物館 国立国会図書館
 世界文化社 東京国立博物館 東京消防庁 東京大学図書館 東洋文庫
 徳川黎明会 平凡社 早稲田大学演劇博物館 早稲田大学付属図書館

写真特集

城下町
 変わりゆく武士
 職人さまざま
 織りから染めへ
 陶磁
 遊女
 遊里の賑い
 貨幣の鑄造
 近世の刑
 門付け
 交通
 農村の生活
 江戸の消防
 三都の祭礼

人間開眼

空から見た住吉大社（大阪市）



太平の世の到来

徳川政権の確立

人質にいく途中で略奪されたり、
信長の命により愛妻やすぐれた長

男をみずから殺さねばならなかったり、戦国動乱の渦
中を歩んだ家康の人生街道は、まことにけわしかった。

その家康が征夷大將軍になったのは、慶長八年（一
六〇三）関が原の決定的戦勝後三年目の二月であった。

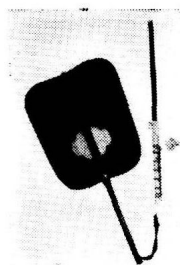
長い苦難に耐え、今ようやく征夷大將軍になった家
康は、信長や秀吉とはおのずから違った政策をうち出
した。当時は下が上にとってかわる下剋上（げきじやう）の思想が一
般化していたので、「天下はまわりもち」と考えられて
いた。群雄たちはいずれも天下をわがものとねらって
いたのである。

信長がつき、光秀がこね、秀吉がまるめた餅を、家

康が食べている「天下餅」の図が物語っているように、
家康の人生街道はきびしかったに違いないけれども、
しかし、信長や秀吉が、苦勞してつくりあげた天下を、
そっくりわがものにしたことはたしかである。

その道程が紆余曲折（きうよせつ）したために、かえって信長や秀
吉政権のもろさがどこにあったのか、それを家康はま
のあたりに見ることができたし、見ただけではなく、
さらにその弱さをついていま征夷大將軍をかちとった
のである。

だからこの戦勝のための長途の行軍は家康にとって、
「天下はまわりもち」という下剋上思想の根源を切断
して、徳川政権が天下に君臨し、永久に存続発展する
ためのかずかずの教訓を、その切実な体験のなかによ



家康陣中遺愛の品



天下餅の図 信長がつき、光秀がこね、秀吉が台の上でまるめ、家康が、これを一人で食べている。江戸後期の絵だが、秀吉は一目でわかるように猿面冠者に描いてある。川柳は、「君が代をつきかためたり春のもち」。

みとるための長い訓練期間でもあった。

信長や秀吉は天皇と結び、畿内を政権の中心にすえたが、家康は源氏の正統であり武家の統領であることを宣言し、京都の公家をていよく閉じこめ、関東において天下に君臨した。源家正統の武家政権という自意識が読みとれよう。

家康・秀忠・家光三代の將軍たちは、広大な直轄領と、八万騎と称されるほどの大軍勢力を常備する一方、大名に対し転封・改易・領地削減など、冷酷な整理統合を断行し、ゆるぎない幕藩体制社会を確立した。

このために農村内の武力を城下に集中し、かつ農民の武装解除を徹底的にすすめ、士農工商の身分制を厳

重にした。これは農民を直接把握して、その生産力を安定させ、そこに政権の基礎を定着させる基本的政策であった。

もちろんゴールド・ラッシュ時代であったから鉱山の直轄や、めばしい港町とか、主要都市などの直轄支配にもぬけめのない対策をめぐらし、国内政策を整備した。

一方、対外政策についても、世界の動向を大観しつつ、すでに没落の運命にあったスペイン、ポルトガルよりは、新しく、太陽の沈まない世界帝国をうちたてつつあったイギリス、オランダと結ぶ政策をとり、幕藩体制との関連において鎖国を断行した。

鎖国は世界のキリスト教弾圧史にも例をみないといわれる徹底したもので、かずかずの殉教や島原の乱などをひき起こしたが、結局西南諸藩の富国強兵政策を切断する一方、海外貿易による利益を幕府が独占するという一石二鳥の効果をあげた。

このようにして江戸幕府の封建体制は、対内的にも対外的にも、ゆるぎない政策を強行して戦国の動乱を平定し、太平の時代を出現させた。

新文化の土壌

ところでこのような時代の展開は、じつは封建体制が動揺し、くずれ、新しい階層の新天地が出現したのではなく、家康が意識したように、源家の正統として幕府をひらくという封建体制そのものとして新発足したわけで、太平の到来とはいえ、相変わらず武家貴族の横行する世界にはならなかった。

しかし、戦国を通過したわが国では、下剋上の風潮がまだなまなましく民衆の生活にみなぎり、海外雄飛の心意気も消え果ててはいない。武断政治の荒療治が、日増しに強化されたとはいえ、村や町のなかに芽ばえ



天下の大將軍家康

「鳴かぬなら鳴くまで待たう
ほととぎす」の歌で示される
ような異常な忍耐と努力で、
天下をわが手に握った徳川家
康。自信と満足感が正装した
肖像からにじみ出る。

育った民衆のエネルギーは、そうやすやすと消しつくすことはできない。むしろ平和の到来により、一面ではいっそう勢力を増した。

それに諸大名たちも、幕府に疑いの目でにらまれることを回避するために、つとめて優柔な態度をとった。加藤清正が熊本へ、兵助・長介という女歌舞伎の太夫と、清十郎・金作という脇太夫、四人を京都から招き、歌舞伎興行をしたのは、慶長十五年（一六二〇）のことであったが、これはかつて伊達政宗が団介という女歌舞伎の太夫を仙台に呼び下して興行したことが、家康の氣にいったという故知にならったものだというのである。こういう風潮は、仙台や熊本だけではなく、おそらく金沢・岡山・広島・高知・鹿児島その他、外様大藩の城下町にもあったに違いない。

このように、戦乱の完全な終結による恒久的平和の到来と、冷酷な幕藩体制社会の新編成が推進されていく条件のもとで、諸大名がとった太平謳歌の順応政策や、新しい時代の社会を開発していく村や町のエネルギーは、武士たち支配者にも、町人や農民にも、人間らしい生活のよろこびを呼びました。

血なまぐさい戦国の世にあっても、成長した民衆の力は、祭礼の風流や盆踊りその他、年中行事のかずかに、早くも豊かな独創的文化をみずから創造しつつあったが、それがこの時期を迎えていちじに花開く条件、つまり新しい肥沃な土壌が、ひろびろと用意されることになったのである。

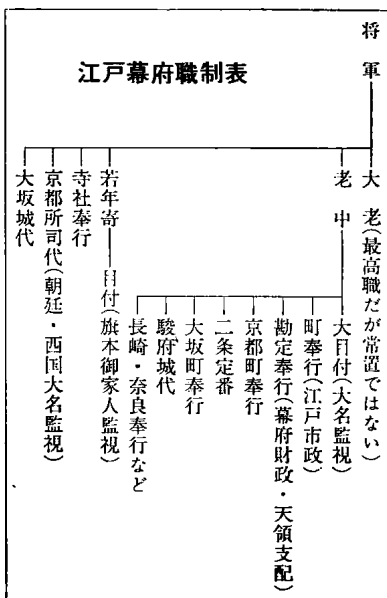
いざやかぶかん

この豊かな沃野に、まず高らかな産声をあげたのは歌舞伎踊りであった。のちの第六章で詳しくふれるように、それは慶長八年（一六〇三）のことで、家康の征夷大將軍就任と同じ年であったというのも奇しき因縁である。

男装の麗人が「傾城買い」、つまり遊女あそびを演じたり、五十人、六十人もの美女が、好色的で華美な衣装に伽羅などの名香をたきしめ、舞台せましと舞い踊ると、観衆はたちまちその色香に陶醉した。

平和の到来は、都市の遊女町を繁栄させたが、わけでも出雲の阿国の創始した歌舞伎踊りは、たちまち各地の遊女に甚大な影響を与え、その遊女たちの演じる歌舞伎は一世を風靡することになった。四条河原の舞台は、じつは三筋町の遊郭の張見世でもあったからで

江戸幕府職制表



ある。

「よし何ごともし打すて、ありし昔のひとふしを、歌ひていざやかぶかんかぶかん」と、浄瑠璃もどきの叙情的な恋歌などを歌いながら踊るのを見ると、なおひとしおに人々は夢の世界にいざなわれた。柔軟で自由奔放な姿態が構成する曲線的な美女たちの歌舞伎踊りは、第二次世界大戦後の平和の寵児として全盛をきわめたエロチックなストリップ・ショーと酷似したものであった。

ストリップパーたちは遊女ではなかったが、歌舞伎踊りの美女たちはすべて遊女で、きわどい扇情的なエロ

代	将軍名	在 職 年 代	備 考
1	徳川家康	慶長 8 (1603)～慶長10(1605)	
2	徳川秀忠	慶長10(1605)～元和 9 (1623)	家 康 三 男
3	徳川家光	元和 9 (1623)～慶安 4 (1651)	秀 忠 二 男
4	徳川家綱	慶安 4 (1651)～延宝 8 (1680)	家 光 長 男
5	徳川綱吉	延宝 8 (1680)～宝永 6 (1709)	家 光 四 男
6	徳川家宣	宝永 6 (1709)～正徳 2 (1712)	家光孫, 旧甲府藩主
7	徳川家継	正徳 3 (1713)～享保 1 (1716)	家 宣 四 男
8	徳川吉宗	享保 1 (1716)～延享 2 (1745)	紀伊徳川貞三男
9	徳川家重	延享 2 (1745)～宝暦10(1760)	吉 宗 長 男
10	徳川家治	宝暦10(1760)～天明 6 (1786)	家 重 長 男

徳川将軍歴代表 徳川氏は三河松平郷から出て、松平氏を称していたが、家康の時に徳川氏に改めた。徳川家の分家としては御三家（尾張・紀伊・水戸）家門（越前松平・会津松平）があつて宗家に嗣子のない時、この分家から将軍を継いだ。後に御三卿（田安・一橋・清水）がこれに準じた。

レビューを演じたのだから、その流行のほどが想像されよう。このように阿国歌舞伎は遊女歌舞伎として、遊郭と密着していたところに特色があるのであって、殺伐な時代のあとに到来した平和の世を飾る、狂おしいまでに解放された人々の一大饗宴であつた。

「夢の浮世ぢやただ狂へ」

決別し自然の美しい人間の声で、「夢の浮世ぢやただ狂へ」と歌うその声には、もはや西方浄土を欣求して、仏にすがる宗教的な中世臭はなく、此岸の世界に、いまを樂しむ近世的な響きが、いきいきと感じられた。

うき世はかつて宗教的な觀念によつて、憂世であり、現実には苦痛と罪に満ちた悲劇的存在にすぎなかった。解放は後生つまり来世に求められたが、新しい時代はこの憂世を追放して、現世肯定の夢の浮世に人間解放の場を発見した。憂世から浮世への転換が、戦国動乱の大きな歴史の進展のなかで、平和の到来とともにもたらされたのである。

阿国の歌舞伎踊り創演の年が暮れると、翌慶長九年は秀吉没後の七年祭であつた。この祭礼にも仏くさい

句はいっさいぬぐいさられ、秀吉をまつった京都の豊国神社で浮かれに浮かれた臨時大祭が催された。

この祭礼の顛末は「豊国大明神臨時祭日記」に詳述されており、その盛儀の実態は狩野内膳が描いた屏風絵によって想像することができる。

このとき上京と下京の町衆たちは、それぞれ対抗して踊りの競演をした。それがまことに大がかりなもので、綾羅錦繡の豪華な衣装に紅梅摺の薄花笠、つくり花を手にした踊り子が、それぞれ五百人ずつ、それととり巻く警固の者が五百人ずつ、さらに床几持が五百人ずつ、この人たちがまたきらびやかな金銀ずくめで南蛮扮装の者もあれば囃子演奏者もあり、莫大な人数であった。

奉納の四座の猿楽やつぎからつぎへくり出してくる仮装行列など、京都の町はこの臨時祭礼に町ぐるみ熱狂しているかのごとくであった。仮装行列のなかには、孕みたる尼さんを先にたて、そのあとから坊主が団扇であおぎながらすすっている風情もあったと日記には記してあり、この祭礼に流動していたふんいきが如実に読みとれる。

本多平八郎姿絵 尾州徳川家に伝わる二枚屏風で、遊芸女を従えた、時代の先端をゆく歌舞伎者が描かれている。これは本多平八郎だといわれ、その恋人千姫がうれしそうに平八郎を見ている。家康の孫娘千姫は大坂落城のとき、坂崎出羽守に助け出されるが、醜男の坂崎をきらい美男の平八郎と恋に落ちた。



家康の將軍就任と秀吉の七年祭、転変する歴史の相克は、かくのごとく冷徹無情な時を刻みつつ流れているのに、夢の浮世に狂い酔う時代の風尚は、そのとどまるところを知らないありさまであったが、やはりこのころが最高潮であったようだ。

天下

さてここで、このように夢の浮世に狂った世相について、考えなければならぬ点がある。第二は、それが歌舞伎や祭礼だけであったのか、もっと他にもあったのではなからうかという点である。

第二の歌舞伎や祭礼のことだが、じつは他にもいろいろなものがあった。これより先、すでに京都の町で